

今回の沖永良部島合宿で僕が求めたものは、より広い洞穴知識であり「喜び」であった。この二つは入り合う所が多分にあるが、「喜び」というものは、たとえある一時期は苦しくても活動を終えた時点において感じることもあるはずである。このタイトルにはふさわしくなく、話が慥躍しすぎるがクラブ活動一年目にあたり少し述べてみたい。「喜び」すなわち満足感であり、充実感であり、幸せである。昨年六月に催された新人強化合宿もその一例であろう。又そういった苦しみばかりでなく、知識欲にも「喜び」を伴うであろう。今回の合宿では各個人の専門的今野を見い出すことも一目的においていたし又僕もそうであった。洞穴という大きな立場から豎穴、横穴あるいは海蝕洞、鍾乳洞、風穴等を問わず数多く探検したいことも目的に入っていた。

こう言う意味では特に瀬名部落や古里部落における全長2Kにも及ぶ洞穴は適していたと思う。風の吹く所では、一般に生成しないと言われているヘリクタイトが瀬名の洞穴では現に存在していたし、又この種類も多種多様である。洞穴学のパイオニアと呼ばれるフランスでは相当研究が分化しているが、我国のそれはまだまだ駆け出したばかりという現状である。洞穴に関する本もまだ2冊しか出版されていない。世間においても、レジャー的要素の濃い探検を通しての洞穴でしかないのである。洞穴内における諸現象の生因の究明、洞内生物の生態と種類、地質学研究による時代考察など列挙するにいとまがない。洞穴学の曙は訪れた。将来の研究対象も充分にある。しかしこれに専念する人は一握にも満たないのである。勿論我々学生はアマチュアであり、全一の事はとうてい手に負えないこともあるだろう。専門家の手を通さなければならぬものもある。測量図とか写真撮影とか洞内事象記録とかいった事は充分こなせるし、より高度の技術を求めるのも可能である。今回の合宿において和部落では化石を多数発見し、かつてこの島が海底にあり後に隆起したことを証明している。ある洞口付近では、昔地上で牛を放牧していたらしいが、その牛の骨の上に炭酸石灰が水に溶けた鍾乳石をかむっていた事から鍾乳石の発達の時間的経過を推し計ることも出来るのである。一般的に言って横穴の方が洞内も美しいし、色々な石の芸術が見られる。これと対称的なところがある豎穴はスポーツ的だと言うことである。昨年夏、第五次新潟県青森千里洞探検がその好例であろう。未踏地とはただ単に処女地であるというだけでなく、洞穴においては地質学や考古学にも大きく貢献すると思うし、これが将来性でもある。洞穴の持つ社会性の一つは観光的価値を見い出すこともある。スポーツ的色合いを持つ探検も人間の有する征服欲にも連なると思う。今回の合宿を終えて僕個人として一体何が残り何を得たのか。少し疑問になるのである。前述の各所にもある様な事はもちろん、この合宿参加以前よりも洞穴に対する視野なり

知識は拡大したと確信する。がしかし、「喜び」の限界をも見たような気がする。個人として、ある意味で今回の合宿に賭けたのである。登山のロッククライミングが僕にとって「喜び」と相通ずる堅穴におけるワイヤの様子もそこまでの行く途中のほうがおもしろいのである。もちろんそのお飯けも見て来るが。

学生ケイビニグの将来も陰しいが、洞穴内現象の生因研究と考古学は僕が考える将来性である。探検記のサブタイトルが横穴彷徨で論旨とちがはぐで論評めいているが春合宿を終えた今の心境並びに感想を素直に述べたものであるから許してほしい。むしろこういった考えの部員もいることを認めるべきと僕は考える。

最後になってしまったが、お世話になった和泊教育委員の林道明氏、瀬名部落の区長、後蘭、皆川部落の公民館を貸していただいた村民の方々、現地連絡本部「初日」旅館の林シゲさん、そして島民の皆様方に御礼と感謝を至します。

調査をおえて

北条孝司

沖永良部島。鹿児島県奄美群島に属し、また世論島とならんで日本の南端に位置している南国の島である。

合宿も終って、帰阪の船に乗る為、私達は和泊から知名に向った。その時タクシーの運転手から話を聞いた。古い伝説によると、この島が海の中から浮び上がったという……。それもそのはずでこの島は隆起珊瑚礁で全島が石灰石でおおわれているし、そこに点在する洞穴の中に珊瑚や貝類の化石が多く発見できた。それよりも注目すべき事は、この島が周囲の島々と非常に異った特色をもっていることである。現在、沖永良部島は第二期の隆起でその姿を現わしており、今もなおその隆起が進行中である。そのためか他の島々に生殖しているハブもこの島にはおらず、島の人々は安全な生活を営んでいる。しかしそのハブも古い昔にはいたようで、越山ではその化石が発見されている。また、過去において他民族の人骨が発見されたことがある。それは日本人よりは、かなり大きく先住民族か、あるいは他民族が漂流の末、流れついたものと見られる。そして私達も洞穴の入口で多数の人骨を発見したが、それは沖永良部人のもので、昔は風葬の習慣があったそうである。

この島は周囲の島々よりも豊かである。それは一応島民の努力もあるが、島の土壌が関係するのである。この島の土壌は周囲の島々と一種異っており、その赤土に永良部百合が育つのである。この花は周囲の島々には育たず、毎年春になると美しい白色の宝石でこの島を飾るのである。そして、欧米諸国への輸出はこの島の大きな財源となっている。

私達が乗った船は夜中の十二時に出発した。永良部の黄金色の灯は小雨の降るしじまの中で、静かに燃えつさるのである。